

山形大学附属郷土博物館報 4

THE MUSEUM OF YAGATA UNIVERSITY 1977 7.1

目次

- 中条家文書展に寄せて…………… (1)
- 1900年代における山形県村山地方中農の所有農具について…………… (2)
- やまがたの紅花…………… (3)
- スギの天然生林…………… (4)
- 「ミツガシワ」考…………… (5)

中条家文書展に寄せて

館長 工藤定雄

「中条家文書」入庫についての概要は、本学中央図書館報第15号(1976. 3. 30)に報告した。新入生を歓迎し、恒例の展示会を催すに主題をもってしたので、既概報に若干角度をかえて、展示品の解題を兼ね、「貴重史料」中条文書整理の中間報告とする。

史料的价值 限られた中世史上の基本史料を纏まった形で保有し、研究・教育上の資料とする意義は大きい。本学の「貴重図書」と呼ぶに値するものである。

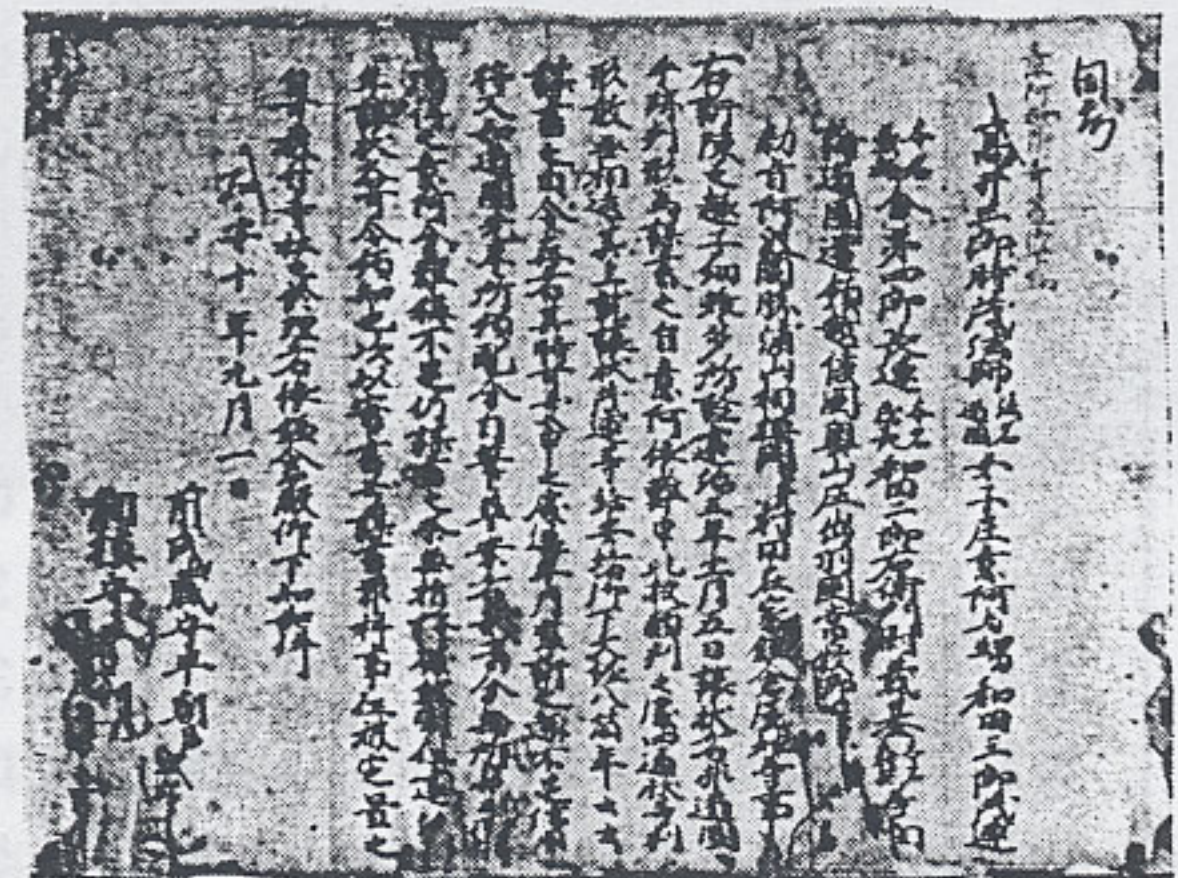
中条家は、源頼朝武家政治創業の功臣の雄として登場する「地頭領主」の出であり、連綿七百年に亘る統を相継ぎ、明治維新におよぶ。破乱曲節の間、断絶することなく、総点数539点の基本史料は、独り中条家の由緒に止まらず、日本の武家社会の歴史を語りかける。人多く頼朝を語り、執権北条氏の事蹟を詳しくするにもかかわらず、頼朝を補佐し、権臣北条氏と相拮抗し、時に争戦の中に相見え、生き抜く部将級の登場する場面の少ないところに、日本歴史の単純素朴性が指摘されている。中央における執権宰相と共に野にあって、一旦緩急の折、いざ鎌倉の出陣をする部将級が本拠地とした「中世の村」を描写する試みは絶無でなかったが十分に果たされていない。越後中条(今日の新潟県中条町)を本拠にした中条家史料の語る重要な本旨はこの点にある。

所領相伝にかかわる讓状、安堵状、充行状、訴陳状、裁許状等が豊富に含まれ、武家政府と村落農民との対応関係が具体的に語られている。財産の分割相続や女子の相続権を語る実体は本文書の一大特徴をなして、学界に寄与するところが多い。室町戦国期における在地豪族層が越後守護上杉氏、守護代長尾氏を中心に、宗庶互に向背を繰返し、守護領国制の中で封建秩序が固められてゆく過程は、まさに戦国絵巻そのものである。中条家が庶

流北条流と袂を別ちながら、守護大名上杉家の十二宰相の中の地位を確立する過程に壮絶な一コマを残している。上杉輝虎(謙信)が、部将中条越前守藤資(中条家)に血判の起請文を残して主従関係を固めている。和製戦国策の開発は今日の魅力である。本文書展で展示した文書の数はいくつか、原本史料を通じて受けた感銘は貴重であったと考える。

整理と保管 700年に亘る歴史を語る基本資料と云えば、1年に1年ずつ残されたとしても、約700点の残存が期待される計算である。有為転変のうちに当然あるべき文書群が、原型を失ない、散佚することが稀でない。本文書群も、維新後散佚している一例である。一度散在した文書群を更めて蒐集することは殆ど不可能に属する。新潟県長岡市の蒐集家反町十郎氏の手におわたった288点については、昨年暮(昭和52. 12)採訪を果たしマイクロフィルム化を果し、本展示会に、それを焼付けて一端を紹介した。本学所蔵に帰している225点の文書と合わせて、中世武家社会を語る纏まった個別史料として整理保管することが出来たことは喜びである。米沢市には、旧所蔵者中条家当主はじめ一族の方々が健在で、この史料入庫について手篤い協力を得た。地元米沢市の図書館(買賜総合文化センター内)並びに上杉家史料館に所蔵されている『中条家文書抄』『総上杉家御家中諸士略系譜』等の関係文書を照合した報告書を予報して一つの緊急報告とする。

(教育学部 教授)



関東下知状案(中条文書山形大学図書館所蔵)「出羽国常枝郷」等につき越訴棄却の下知状

1900年代における山形県村山地方中農の 所有農具について

岩 本 由 輝

1960年代以降、日本農業は急速に変わった。自動耕耘機をはじめ、田植機や稲刈機などが今日多くの農家によって所有され、その代金支払のために出稼ぎが一層促進されるという事態も起り、農業の危機とか農家経済の解体とかということが高度経済成長の過程で論議されてきた。つぎつぎと農家を相手に発売された農業機械は、化学肥料や農薬の使用増大と相まって、農家の支出を農業収入だけではとうていまかなえない規模にふくらませた。農業機械の普及は、農家の生産力向上に寄与する以前に、農家経済を圧迫したのである。

日本農業は手耕段階から牛馬耕段階を経て、現在にいたっているが、牛馬耕段階の一般化がいつ頃かは実はあまりはっきりしない。近世初頭に完成したといわれる農書『清良記』によれば、その当時から馬の使用があったようにいわれているが、湿田が多かった地方では牛馬耕の採用は事実上不可能であったろう。1900年代に強行されたサーベル農政のもとで乾田馬耕の奨励が行なわれたのはそのことを示すものである。

最近、別の必要があって『大日本農会報』第319号(大日本農会、1909年1月)をみていたら、当時、山形県農事試験場員であった阿部一郎氏の「山形県村山地方中農の農具」という注目すべき報告がのっていた。阿部氏が農学校在職中に生徒の助けをえて、村山地方の中農20戸

を調査したもので、その所有農具は下表にみるとおりである。なお、この20戸の中農の耕作反別であるが、平均して田1町3反9畝22歩、畑8反5畝06歩、合計2町2反4畝28歩となっており、田はすべて一毛作、畑は桑畑および大麦と大豆の輪作がもっとも多く、蔬菜や果樹その他の作付は少ないといわれている。そして、「当地方の農家には家畜少く田畑共に畜力を利用すること甚だ少なし」と述べられているが、下表の所有農具のうち、牛馬耕に関する馬鍬と犁と轡と鞍についてみると、馬鍬以外は全戸所有となっておらず、とくに犁が4戸に1台の割ということは、いまだ中農においてすら手耕段階を脱していないことがわかる。また、馬車はなく、荷車が2戸に1台の割というのも、道路事情もあろうが、運搬が主に人の背や牛馬を所有していたとしても駄付形式によっていたことがうかがえる。

中農にして、このような状態であった。貧農の場合、もっと所有農具は少なくなるはずであり、牛馬耕などおよびもつかないであろう。そうなれば、日本農業における牛馬耕段階というのは、実際には60年にも満たない短かい期間であったのではないだろうか。

下表の1900年代における村山地方中農の所有農具は、阿部一郎氏の作製になる中農1戸平均所有農具にもとづくものであるが当時の農業がどのような労働手段をもって行なわれていたのかを知る資料として貴重なもので、そのままの形で掲げることにする。価格のメドを知るために、1900年代の米価をあげれば、1石あたり11円〜17円(深川市場平均相場)である。

種 類	数量	平均単価	総 価	種 類	数量	平均単価	総 価	種 類	数量	平均単価	総 価
鍬	5.5	1.090	5.995	アヲ(槌)	2.0	130	260	桶(1斗 6升入)	1.0	700	700
備中鍬	4.0	860	3.440	肥 樽	2.0	1.000	2.000	砥 石	3.5	100	350
唐 鍬	1.5	650	975	肥柄杓	2.0	130	260	秤	2.0	(5貫)1.800 (2貫)850	2.350
馬 鍬	1.0	1.190	1.190	稲刈鎌	5.0	100	500	藁打槌	2.7	860	232
犁	0.25	1.560	390	草刈鎌	4.4	153	673	押 切	1.0	970	970
雁 爪	2.7	135	365	千 齒	4.6	1.980	9.108	鞍	0.8	310	248
肥溜桶	6.4	1.540	9.865	靱打棒	6.3	070	441	策	2.0	300	600
肥荷桶	4.3	400	1.720	千 石	1.0	2.240	2.240	稻(ママ)抗	50.0	035	1.750
肥箕	3.0	370	1.110	靱通シ	2.3	180	414				
荷 棒	3.0	085	255	唐 箕	1.0	4.880	4.880	合 計			79.120
櫓	2.7	2.000	5.400	万 石	1.0	2.100	2.100	外雑具			7.912
ヤセ馬	0.7	260	182	靱摺白	1.3	2.920	3.796	総 計			87.032
山 刀	2.4	430	1.032	箕	4.3	550	2.365				
如 露	0.8	220	176	揺 板	1.0	900	900				
枘	(1斗)2.600 4.0(1升)400 (5合)320		3.720	荷 車	0.5	11.500	5.750				
				轡	0.5	275	138				
				熊 手	1.6	175	280				

備考1. 各農具の数量は調査対象農家20戸の平均により、また、その単価は価格不明のものや価格に甚しく差のあるものを除いた調査対象農家10戸の平均により求めたもの。

2. 枡4個は、1斗枡1、1升枡2、5合枡1として、秤2個は、5貫秤、2貫秤各1として見積ったもの。

3. 雑具代は表に掲示した以外の諸器具代として見積ったもの。

以上のような農具が、使用の状態を理解できる形で配置された博物館が是非とも欲しいものである。

(人文学部 助教授)

やまがたの紅花

馬場 肇

紅花は菊科べに属の1年草木で寒暖いずれの地でも栽培される植物である。茎の高さは1メートル余り、葉は広披針状形で尖刺ありアザミを思わせる濃緑色である。花は刺のある総苞管状花で紅黄色を呈し一度に開花しな



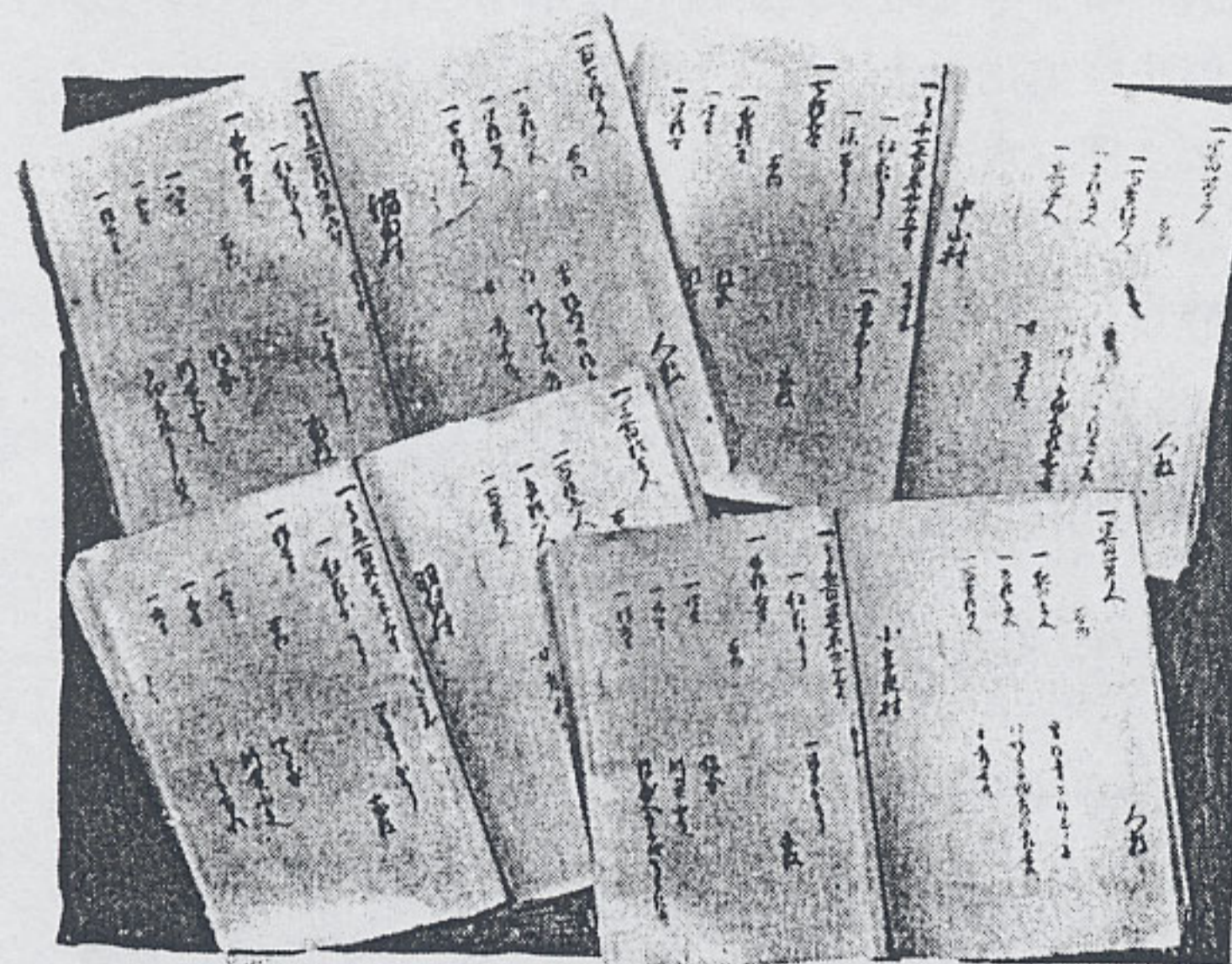
紅花とその花卉

いで約十日間で暗赤色となり、花が終ると淡褐色菱状小豆大の光沢ある堅果となる。農作物的分類は特用作物で染料、薬用、食品着色剤に用い、種子油も古くから食用燈用、紅花墨の原料に用いられているが、最近、薬用、塗装油などに利用面が開発されて来た価値ある作物である。

学名、*Carthamus tinctorius* L., 外国名 *Safflower* (英), *Saflor* (独) で、日本では呉の国から渡来したから呉藍、久礼奈為、そして茎の先端から花が咲き始めこれから摘み採るので未摘花と呼んだ。また、地方的な呼び名は生バナ、ハナ摘み、ハナの山形 もみじの天童……。などすべてハナと呼んだ。紅は紅花から分離した赤色素をいい、紅染、口紅は紅花の赤色素を利用したも

のである。

原産地はエジプトか地中海沿岸といわれているが、いずれか判明しない。日本には中国から応神天皇の御代に伝わり、仁徳天皇の頃から染料として用い、江戸時代特に元禄の世には全国で栽培された。山形県内での栽培は長井邑鑑(文禄4年)によると、米沢藩の御役作物として柿、桑、青苧、漆とともに「山霧煙草 川霧紅花」といって早朝余り気温の下らない、そして肥沃で排水良好な弱酸性土壌である米沢の北方、最上川上流や、支流の吉野川、鬼面川、白川に沿うた川原畑に栽培した。その



古文書長井邑鑑

後、最上川中流とその支流を中心とした地で栽培が盛んに行われ、加工した干紅花の生産量も1,300~1,400駄

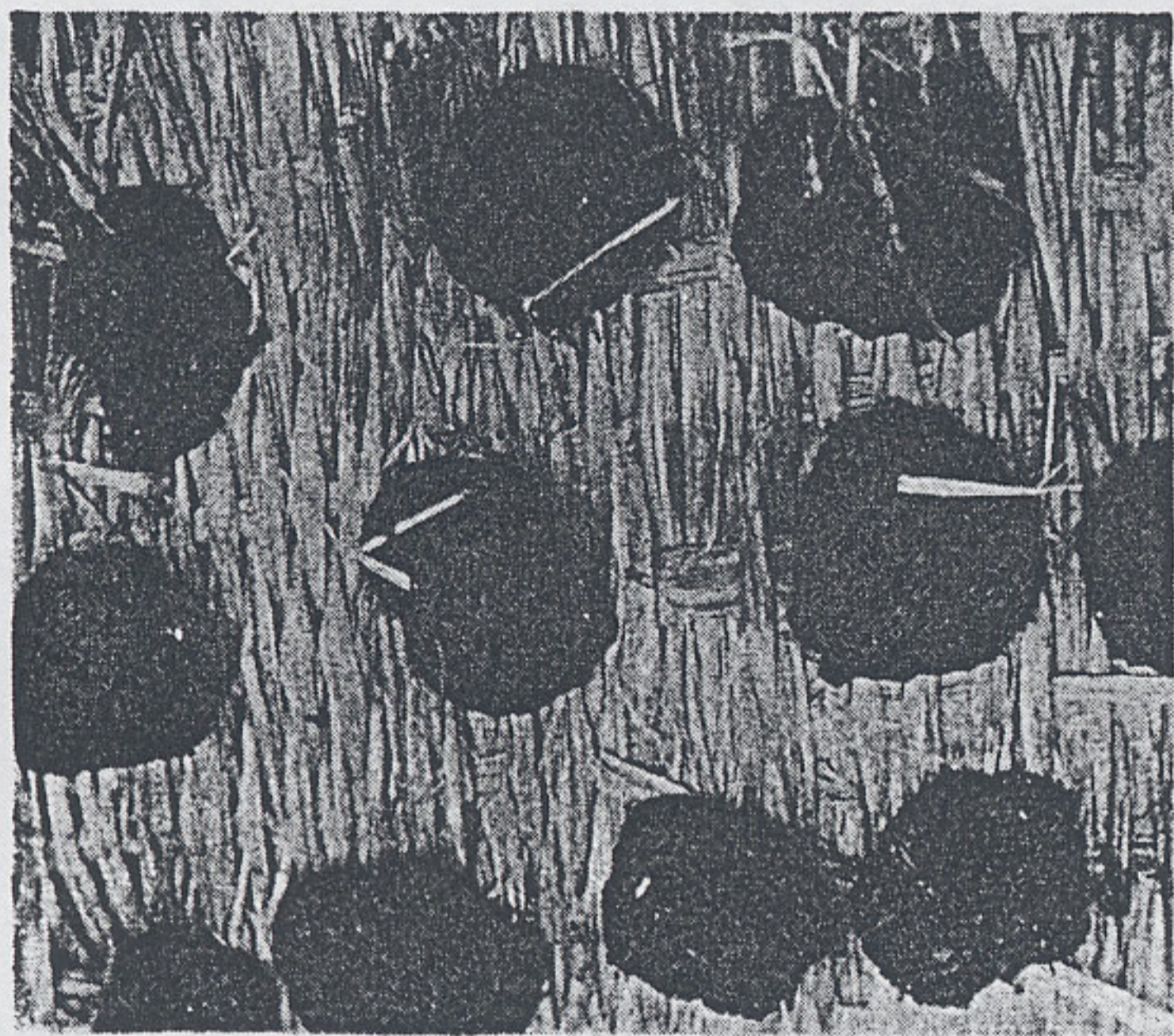
(1駄は120キログラム)に達し、紅商人も出現して干紅花は京に運ばれた。然し、明治の世になって化学染料の利用とともに、特別の場合を除いての外は紅花は利用されないまで衰え、栽培も殆んどされなくなったが、最近になり天然物が再び見直され、紅花は郷土の花として甦った次第である。

紅花には早生、中生、晩生があり小姫牡丹、大姫牡丹、鬼牡丹とそれぞれ呼ばれている。山形県内では早生の小姫牡丹が広く栽培されたが、現在は、この種の改良したものを「最上紅花」と命名して広く栽培されている。

紅花は病害虫に弱いから種子の選定消毒や耕地の消毒に細心の注意が必要である。病害は一種の炭そ病で開花期を間近に控えた時に茎が曲折し、枯死する伝染力の強い病害である。防止の完全な方法は残念ながら現在も見当らない。然し、防虫(アブラ虫)は完全に行われている。消毒を行った種子を4月上旬から中旬にかけ基肥に堆肥を施した畑地に条播きし、間引(間引した紅花は食料とする)、追肥、中耕、消毒を行いながら栽培する。天候が春に晴天が続き、6月上旬に雨が降り7月上旬頃まで気温が高ければ1本の紅花に40~50個の蕾を見るこ

とが出来る。開花は7月10日頃から始まり20日前後に満開となるがこのとき晴天が続けば豊作で、花卉が3〜4個垂れ下った満開の花を「3片紅」と称し、この花から摘みとれば紅の含量も収穫量も多いといわれ、この花を摘みとる。

摘みとった花を生花といい、大略次のような方法によって使用目的に適した加工を施し干紅花として売買される。(1)乱花；生花をそのまま速やかに乾燥したもので、主に薬用に用いられる。(2)餅紅；花餅とも呼ばれ干紅花の代表的なものであったが現在は殆んど行われていない。製法は生花を水洗いして夾雑物を除き少量の水を加えてよく揉み水溶性黄色素（荒黄気といい染料、着色に用いられる）を絞りとったあと、一定の湿度と温度で自然発酵したあと小判型として天日で乾燥する。友禅、西



餅紅の乾燥

陣織および京紅の原料に用いられた。(3)摺花；生花を摺り潰し、荒黄気を除いて風乾する空気酸化法で餅紅とおなじく染料・化粧品原料などに使用される。現在の山形県産の干紅花は本法によるもので、例えば、昭和48年には3,350キログラムの生産量があり、大部分を県外に輸出している。

“紅しぼる 灯かげちらつく 余寒かな”の古歌にあるように紅は光と熱に弱く、昔から紅の採取は干紅花の製法とともに秘伝とされ、詳しい記録は見当たらないが大略次のようである。まず、干紅花を水に浸して黄気を除いたあと、椿、あかざ、藁などの灰汁に浸漬し紅を溶出する。現在は、これらの灰汁の代わりに炭酸カリウムの水溶液を用いる。溶出した紅のアルカリ液に染布を浸し、烏梅か生酢を少量ずつ加えて染色するか、紅のアルカリ液に前述の酸を加え紅を沈降し水洗乾燥して口紅とするが現在は酢酸、クエン酸が使用されている。然し、クエン酸やリンゴ酸などのオキシ酸の残存は紅の退色の原因

となるから注意を要する。紅の含量は生花の0.3〜0.5パーセントに過ぎない。

紅はカーサミンと呼ばれ、数多くの研究報告があるが未だ化学構造が確定していないようである。然し、ポリオキシ・キノン型のカルコン類で、水溶性黄色素はポリオキシ・フラボノイド類の混合物と考えられている。

(工学部 技官)

スギの天然生林

須藤 昭二

スギはヒノキなどよりも古い日本固有の植物であって、全国いたるところに天然に分布している。しかし現在では大面積の純林状の天然生林は非常に少なくなり、秋田地方と四国の魚梁瀬地方のみとなってしまった。天然生の多くは孤立状態の疎林であって、他の針葉樹や広葉樹などと混生している。スギは幹が通直で大材となり、すぐれた割裂性を有するので古くから植林された。したがって厳密な意味での自生地は定めにくい場合もある。

人工植栽の分布範囲の北限は北海道札幌付近であるが、立派な植栽林は岩見沢市に見られる。また南限は奄美大島や沖縄に見られるが成績はあまり良好でない。しかし台湾の阿里山山系の林分やジャワのパバンダヤン山付近は美林であると聞く。さらにインドにも植えられているし、最近ではモスクワにもあると聞くが、さだかでない。また中国での自生説もあるが、これは民族移動の波のひとつと、スギ適地の類似の環境から割り出されたものであって自生の説は疑わしい。いずれにせよ、スギは立地的にも気候的にも適応性の幅の広い樹種であって変異体が多く、若い研究者を悩ます植物でもある。

スギは花粉分析やその他の研究から地質時代の第三紀鮮新世に誕生したとされているが、近世にいたるにつれてしだいに衰退の傾向をたどった。現在では広葉樹に圧迫され、その分布も狭められており数紀前の遺された植物である。

スギの源は屋久島とされ、北に向って分布したと言われている。その拡がり方のひとつのコースは屋久島から四国にわたって魚梁瀬に美林をつくり、さらに本州にいたって紀伊半島を横断し、静岡、神奈川方面から房総半島を過ぎて金華山近くまで分布した。もうひとつのコースは屋久島から四国にわたったものが中国山地にはいり、中央山脈沿いに雪をたよって北上し、きびしい風雪に耐えながらも秋田に美林をつくった。途中、北陸のスギと東海地方、紀伊半島のスギと合流し、つながったものもあると言う。

このような説はなんとなく……そのようなものかと思
うときもある。しかし屋久島が果して日本のスギの源で
あるのかどうか。屋久島は樹木の生育に恵まれた立地で
あるとのことだけで、そこがスギの源を発する地とする
説は納得させ得るものではない。

スギは裏日本と表日本の気候の別で分けられたが、裏
日本に分布したスギをウラスギ、表日本に分布したスギ
をオモテスギとしている。植物は分布圏を拡げてゆく場
合に、当然あるところで生育の限界に達するときがある。
そこにそのまま止まって安定した分布圏をつくりあ
げる場合と、さらに強引にその限界を超えて分布を拡げ
る場合とある。この場合はその植物自体が形態的あるい
は生理的に若干の変化を受けるのが普通である。すなわ
ちこのような変化そのものが、限界を超えて分布を拡げ
させると言うことになる。いまとなって人工植栽林も
ふくめればウラスギの形態と生理をそなえたスギの分布
は裏日本だけでなく、表日本にも非常に多くなってきて
いる。一般に伏条枝などで栄養繁殖をするものは分布圏
を拡げることになるが、ウラスギはこれに属すると言え
よう。

日本のスギはふたつか、ひとつかと言うことは疑問視
されているが、これにはいろいろの説が出されている。
紙面の都合で紹介することは出来ない。遠山富太郎氏は
「杉のきた道(1976:中公新書)」の著書に東海、東近
畿、北陸の地域こそスギの分布の中心地でないかと述べ
ている。これらの地域がウラスギとオモテスギが見事に
混生しており、四手井綱英氏は年降水量が2,000 mmを超
える箇所にウラスギが分布し、オモテスギはそれ以下の
降水量の箇所に出現するとし、これらの地域で説明して
いる。さらに第三紀中頃に本州中央部を横断した Fossa
Magma の存在を植物学的に考察して見ればまたどう言
うことになるだろうか、面白いと思う。

山形県内にも天然性スギを見るが、ほとんどが栄養繁
殖で殖えている。天然生スギの分布するところは雪が多
い。雪は多いけれども春の雪融けは非常にはやい場所
である。このことはウラスギの天然生林について共通して
言えることである。

これまで保存されてきたスギの天然生林に対しては、
単に山への思慕と言うだけではなく、また個体の老衰を
いつまでもと言うだけのことでなく、非常に古い時代
に出現した種属としての古さに対して、適当な条件のも
とに保護することが出来れば、きわめて旺盛な生育を示
すものであり、そうしたいと念ずるものである。

(農学部 教授)

「ミツガシワ」考

山形 おさむ
理

5月14日(土)、朝、石山美恵子さんから電話があっ
た。ミツガシワの花がさいたので、写真を撮りにこない
かとの誘いの電話である。今年は花が貧弱であるとい
う。私は、研究室での所用を済ませ霞城のお濠端の石山
邸へ出かけた。

可憐なミツガシワの花をカメラにおさめながら、この
植物についていろいろと話をした。

石山さんは山形フローラのメンバーであり、私ども俳
句仲間では植物博士とよばれている。

石山さん所蔵の結城嘉美先生の山形県植物誌(昭和9
年7月刊)を拝見する。

ミツガシワ, *Menyanthes trifoliata*: 朝日嶽・志津
・月山・葉山・浮島大沼・白龍湖・米沢・小国, 上記の
8地点で現生している。昭和47年刊行の「山形県の植物
誌」には、善宝寺・湯沢沼・葉山(長井市)・吾妻山の
4地点が追加されている。山形第四紀No.1に、私は「山
形県のミツガシワ」を書いた。その時点(昭和34年)で
は、現生地は16箇所であった。新庄(2地点・111m・140
m)・蔵王片貝沼の東の湿地(1400m)・大鳥池の三角地
(1070m)・鳥海山(つるま池)・大井沢の根子部落附近
等、県立博物館の吉野智雄先生によると、酒田市藤崎
(35m)・山辺町琵琶沼(600m)にも現生している。



山形県西川町大井沢(標高500m)のミツガシワ

大井次三郎氏の日本植物誌によれば、
ミツガシワはやや肥厚した多年草で、水湿地または浅水
中にはえ、根茎は太く匍匐し、花茎および葉をつける。
葉は互生して、3小葉からなり、花は白色また帯青色で

ある。種子は少数で、円形、扁平、光沢があり鮮赤色をなし、やや大形である。(径2.5〜3mm) VI—VIII, 北海道, 本州・九州の池畔・河畔にはえる。北半球の寒地一帯にはえる。

この植物の種子は化石として地層に残る。この種子遺体を研究している大阪市立大の粉川昭平氏によると、現生種は北半球の緯度70°〜35°にわたって、典型的な周極分布を示すという。日本では北部北アルプス・東北地方以北は普遍的な分布地域となっているが、温量指数100°以上の暖温帯では著しく局地的不連続を示す。化石では西部シベリアの漸新世から報ぜられた *Menyanthes parvuia* Nik. が最も古く、以降現世に至るまで、ドイツ・ポーランド・ソ連・英国などにひろく分布する。カナダ・アメリカでは洪積世のものがわずかに報ぜられたにとどまる。日本では56地点より知られ(うち7地点はメタセコイア植物群と併出), 全土にわたっている。最南の産地は鹿児島県下(32°N)にある。

従来、ミツガシワの種子が含有する地層は寒冷気候を指示するため第四紀層とされていたが、会津盆地の塩坪層・岩手県の志和層・近畿地方では西宮市寒天小屋等新第三紀鮮新世相当層からも、ミツガシワの種子が発見された。

私は、ミツガシワの種子を含む、泥炭・亜炭などを薬品処理し、その中にふくまれている花粉をしらべている。はじめて岩手県の志和層のものを発表したのは昭和32年である。このミツガシワ層の分析結果は、*Sequoia* type と *Toxodium* type が優勢であったので、当時から鮮新世ではないかと考えていた。近年その地域を調査された岩井淳一先生等によって、第三紀層であることが確認され、私の花粉分析の結果も参考文献として掲げている。

この岩手県のサンプルに手をつけたことが動機となって、今もミツガシワ層の花粉の研究は続いている。

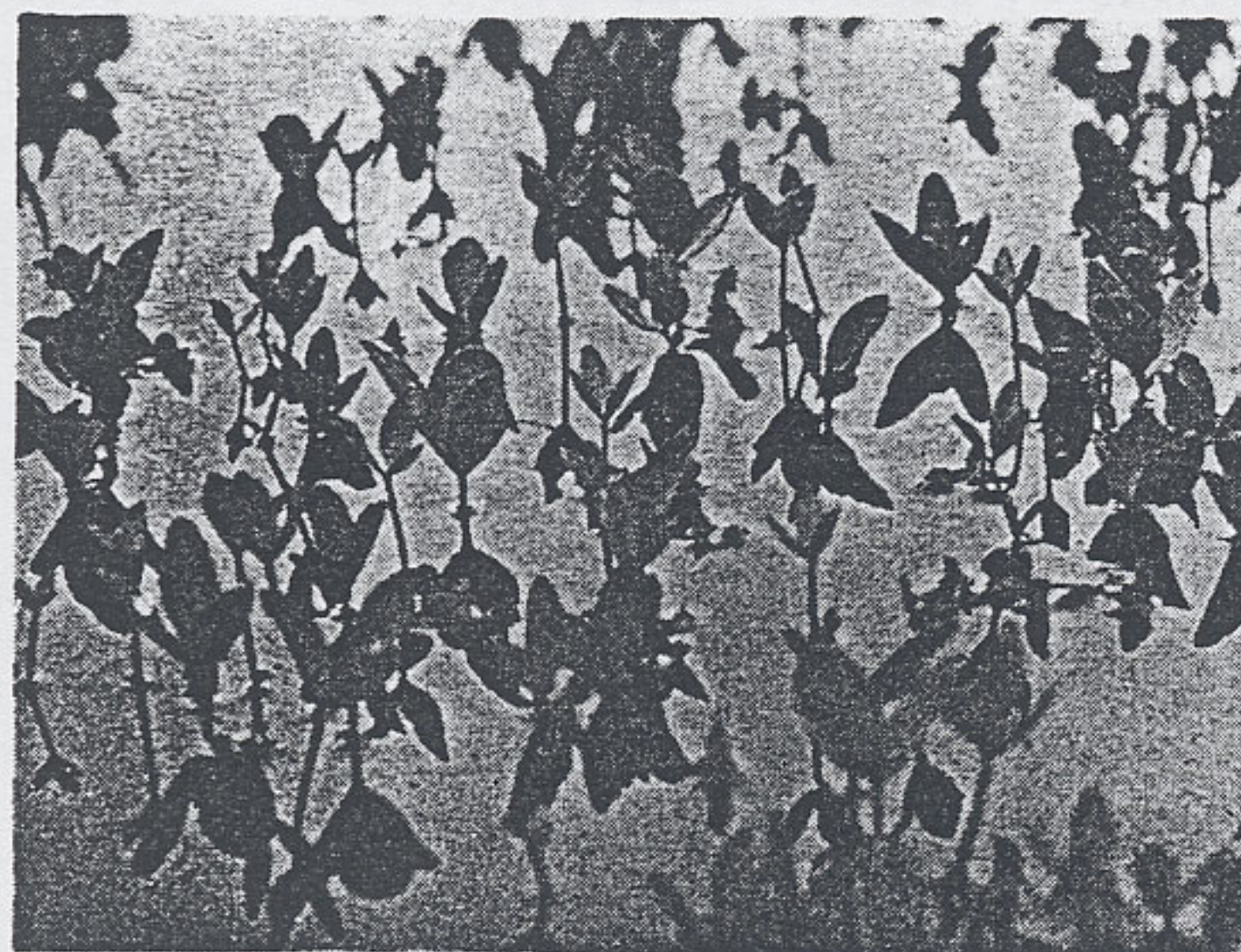
各地の現生地をしらべ、自分の庭にもミツガシワを移植してみた。何故この植物が衰えていくのか。

水の流れのかなりあるところには、ミズバショウははえているが、ミツガシワはみあたらない。水がよどんでいるところにしかはえていない。庭の古火鉢に鳥原山のミツガシワを植えていたが、これにひびが入り水がなくなってしまう、今はショウブがはえておりミツガシワは消えている。他の植物に負けたのではなからうか。よどんだ水、しかも他の植物が侵入しない程度の水がミツガシワに適した環境であろうか。

保護せねば消滅してしまうミツガシワ、幸にも白龍湖には残されているが、これとて大々的な干拓工事により水田化したため、よほど注意しないと白龍湖のミツガシ

ワも生存がむずかしいのではないか。

可憐な花をつけたミツガシワ、鳥海山の千畳ヶ原では泥炭層には花粉では数個確認しているが、植物そのものはすでに現生していない。



秋田県八幡平頂上(1500m)のミツガシワ
(田宮良一氏撮影)

(教養部 教授)

博物館利用状況(入館者数)

年度		昭和49	昭和50	昭和51
区分		(人)	(人)	(人)
一成	個人	890	1,114	1,134
	団体	146	162	202
大学生	個人	199	200	245
	団体	143	262	166
児生	個人	16	10	36
	団体	317	39	133
合	個人	1,005	1,324	1,415
	団体	706	463	501
計	総数	1,711	1,787	1,916

<特別展>中条家文書展見学者数

(昭和52. 5.30〜6. 9)

一成	個人	50(人)
	団体	0
大学生	個人	175
	団体	105
児生	個人	0
	団体	45
合	個人	225
	団体	150
計	総数	375

山形大学附属郷土博物館報 No. 4

1977. 7. 1 発行

編集兼発行人 山形大学附属郷土博物館

(〒990) 山形市小白川町1丁目4-12